

令和八年九月度 御報恩御講拝読御書

開目抄

文永九年二月

五十一歳

日蓮といゐるし者は、去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。此
は魂魄佐土の国にいたりて、返る年の二月雪中にしるして、有縁
の弟子へをくれば、をそろしくてをそろしからず。みん人、いか
にをぢぬらむ。此は釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国、当世
をうつし給ふ明鏡なり。かたみともみるべし。

令和八年九月度 御報恩御講 『開目抄』

(御書五六三頁一〇行目～一二行目)

【通釈】

日蓮という者は、去年の九月十二日子丑の時に頸をはねられた。この抄は、日蓮の魂魄が佐渡の国に至り、翌年の二月に雪の降り積もる中で書き記して、有縁の弟子達へ送れば、(末法の法華經の行者が受ける難を)怖れるであろうが怖れるものではない。見る人は、さぞかし怖れを抱くだろう。これは釈迦・多宝・十方の諸仏が未来の日本国の当世を映した明鏡であり、(日蓮の)形見とも見るべきである。

【主な語句の解説】

子丑の時：現在の午後十一時から午前三時頃の時間帯を指す。総本山第二十六世日寛上人の『開目抄文段』には、『子丑の時』は末法の蓮祖、名字凡身の死の終わり(中略)寅の時は久遠元初の自受用身の生の始め(文段一六七)とある。

魂魄：ここでは、上行日蓮の本地たる久遠元初自受用身としての魂魄の意。

多宝：法華經の虚空会に出現して、法華經が真実であることを証明した仏。釈尊は宝塔中に多宝仏と並座して説法した。

十方の諸仏：東西南北の四方と東北・東南・西北・西南の四維に、上下の二方を合わせた全ての世界にいる、無数の仏のこと。かたみ(形見)：第六十六世日達上人は「この品(法華經勸持品第十三)は、大聖人様の形見とも見るべきであります。また、この開目抄も同じく、大聖人の形見であります(達全一一三二九)と指南されている。

【背景と大意】

本抄は、佐渡配流から四力月後の文永九(一二七二)年二月、大聖人御年五十一歳の時、佐渡塚原において著され、四条金吾を通じて門下一同に与えられた重要書で、『観心本尊抄』と共に御書十大部に数えられています。上下二巻からなり、題号は大聖人御自身によるもので、法本尊開顯の書である『観心本尊抄』に対して、人本尊開顯の書と称されています。

内容は、冒頭に「夫一切衆生の尊敬すべき者三つあり。所謂、主・師・親これなり」(御書五二三)と主師親三徳の大事を示されたのち、儒家・外道・仏法の浅深の各段階における主師親について詳説され、結論として「日蓮は日本国の諸人に主師父母なり」(同五七七)と、大聖人御自身こそ末法の主師親三徳兼備の御本仏であることを明らかにされています。

当時、竜口法難から佐渡配流に至る法難の余波により、多くの者が退転していく状況にありました。このことから大聖人は、本抄に「我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ」(同五七二)との御本仏の三大誓願を示し、いかなる大難が起きようとも正法を弘め、衆生を救済せんとの大慈大悲を明らかにされたのです。まさに本抄の御執筆は、一門の疑いを晴らし、さらには真実の主師親三徳を知らない末法の衆生の「目を開く」ためであり、本日の拝読箇所には「かたみともみるべし」と仰せられているのです。